

# 文学作品と経験の語り方

—W.ベンヤミンにおける経験へのアプローチを手がかりに—

辻 敦子

## 1. 経験の語り

私たちが生きる過程で出会うさまざまな出来事は、語り出されることによって経験となる。自律的主体の形成を目指す教育(学)のテキストは、経験を人間の成長・発達との関係において語ってきた。この文脈において経験は、個人が将来、社会において有用な役割を果たせるようになるために、個人の内側へと蓄積されるべきものと捉えられる。このように経験を捉えると、ひとつひとつ特異であるはずの出来事は、旧来の決まり文句や、何の役に立ったのかという観点から語られることが多くなる。このような状況は、「経験の語りの固定化」と捉えることができるだろう。「あの出来事は、結果的に彼女の成長に役立つものであった」というような語りは、私たちにもたらされた出来事を、事後的に理解可能な形で自らの経験に位置付ける語りである。このような決まり文句は、出来事にわかりやすい、型どおりの決着を付けることを可能にし、そうすることで、教育場面を破綻させることなく、いつもとかわらない日常を取り戻すことができもする。この意味で経験の語りの固定化は、価値観が多様化する現代の教育現場において、なんとか社会と個人をつなごうとする際のある種の工夫といえるかもしれない。だが、このような語りが効率化を第一義とする「Plan-Do-See-Action」という目的合理的な形式に従っているとすれば、どうであろうか。工夫であったはずの経験の語りの固定化は、教育に生じているさまざまな出来事が開く意味生成の契機に対する私たちの感覚を鈍らせ、教育を自律的主体の効率的な再生産という機能に閉じ込めてしまうという事態をも招くのではないか。

本稿では、教育(学)における経験の語りの固定化を再考するために、経験(Erfahrung)をその「語り方」という側面から改めて検討する<sup>1</sup>。それは、経験概念そのものを精緻化し、経験の貧困を批判し、その回復を求める道とは別の道を探りながら、経験について考察しなおしてみたいからだ。このような経験の語り方への関心は、近代教育学を「物語」という観点から批判的に再考する諸研究と結び付けることができるだろう<sup>2</sup>。

他方で、経験の語り(narrative)への注目が、大きな物語が終焉したとされるポストモダン状況における小さな物語の収集と分析にのみつながるならば、それは、センチメンタルな「自分探し」や自律的主体とそのような主体概念の強化、そして意識的、無意識的な他者・他者性の排除へと結び付いてしまうこともある<sup>3</sup>。またそこには、他者を自己の目的の手段とするような個人主義や、真理を語ることを不可能にするような相対主義に陥る危険性が常に付きまとうことになる。そこで、個人主義や相対主義を回避し、出来事において意味生成をもたらすような経験の語り方が問題となってくる。本稿では、成長・発達という経験の語りの枠組みからはすり抜けてしまうような出来事を、経験として語り出す語り方について考えてみたいのだ。それは、私たちにもた

らされる出来事の質自体を検討することにもつながるだろう。

このような経験の語り方についての考察は、豊かな経験がどのように生み出され、いかに語り出されるのか、また、豊かな経験の語りを孕んだテキストをいかに読み込むのかという問題とも関わると考えられる。教育学の中心概念のひとつである経験が、どのように語られ、また読まれるべきかは重要な課題のひとつといえる。

以上のような問題関心から、直ちに経験を語る教育学のテキスト分析・批判に進むのではなく、その前段階として本稿では、私たちの経験そのものを変容させるような文学作品における経験の語りを考察することにする。それというのも、そのような優れた文学作品は未だ概念化されていない経験の特質を先行的に描き出しているのみならず、そのような経験の語り方が示されもしているからである。このように課題を設定するとき、この考察の手がかりとなるのは、文学作品における経験の語りを問うてきたヴァルター・ベンヤミン(Benjamin, W. 1892-1940)の思索である。

## 2. 文学における経験の語り

「ゲーテの『親和力』(1924-25年)においてベンヤミンは、批評と注釈の違いを以下のような比喻によって述べている<sup>4</sup>。

ひとつの比喻として、成長してゆく作品を炎をあげて燃える薪の山と見なすならば、その前に立つ注釈者は科学者のようにであり、批評家は錬金術師に似ている。科学者にとっては木と灰だけがその分析対象であり続けるのに対し、錬金術師にとっては炎そのものこそが謎を、生き生きとしてあるものがもつ謎を秘めている<sup>5</sup>。

もちろんベンヤミンは批評家として、「炎をあげて燃える薪の山」である文学作品の、揺れ動いて形を変え続ける炎にこそアプローチしようとする。つまり、文学作品における生きて動きつつある謎としての経験へと接近しようとするのだ。

ベンヤミンは数多くの文学作品を批評しているが、そのなかでも、プルースト・ボードレール・カフカ論は、ベンヤミンの経験へのアプローチの特質を考える上で重要である。以下、ベンヤミンがどのようにこれらの作家の作品のうちに生きた経験の謎を見ているのかを、それぞれの書き手の連続的な主体を中断するような出来事に注目しながら見ていくことにする。

### 2-1. プルースト「物体」と無意志的想起における経験

さまざまな著者からの引用や、ベンヤミン自身の考察の断片からなる『パサーージュ論』に、マルセル・プルースト(Proust, M. 1871-1922)の『失われた時を求めて』(1913-1927年)から次のような引用がある。

過去を喚起しようとするのはむなしい努力であり、われわれの知性の一切の努力は役に立たない。過去は知性の領域と射程圏の外部に、われわれが予想もしない……何かの物体の内部に、隠されている。そんな物体に、われわれが死ぬ前に出会うか、それとも出会わないかは偶然でしかない<sup>6</sup>。

過去は、私たちが自らの意志で思い出すことができると考えているような個人的記憶のなかにあるのではないとプルーストはいう。プルーストによれば、私たちが意志的に思い起こそうとする「意志的追想」が過ぎ去ったものについて与える情報には、過ぎ去ったもの自体が少しも含ま

れていない。過ぎ去ったもの自体は、何らかの現実にある「物体」のなかに隠されている。ここで述べられているブルーストの意味での「過去」は、意味生成をもたらすような出来事と捉えなおすことができるだろう。その内部に過去を隠しているような、ある物体との出会いの瞬間は、「私の」と呼べるような連続的時間軸には位置付かない。このような、語りの主体が空白となる瞬間に動き始める意志によらない回想を、ブルーストは「無意志的想起」という概念で描いている。

ブルーストのこのような考えをうけてベンヤミンは、意志的に思い出すことのできるような記憶ではなく、忘却の内にあるような、意志的には思い出すことが困難な出来事を契機として経験は語りだされ得るのだという<sup>7</sup>。経験の語りをもたらす手がかりである物体が何であるかは、ブルーストのマドレーヌ菓子とその香りのように、偶然の出会いによって無意志的想起が動き出すその瞬間まで、私たちには隠されたままである。それは、寒い朝のある香り、なにげない生活の音、日の陰った通りに立つ標識、もしくは宝箱のなかで忘れられているガラクタかもしれない。

ベンヤミンが捉えるブルーストは、経験の語りをもたらす手がかりとなる物体と、偶然出会うその瞬間に、自分の場所をすっかり無意志的想起という語り手に明け渡してしまう。書き手の主体が中断された空白の瞬間に動き出す無意志的想起は、際限なくテキストを紡ぐ。なぜなら、言葉にとって空白の瞬間は、常に捉え損ねざるを得ない過剰さを帯びているからだ。その際限のなさが、校正刷の余白を誤植の訂正ではなく、新たなテキストで埋め尽くさせ続けたのだとベンヤミンはいう。ベンヤミンに従うならば、『失われた時を求めて』という文学作品自体が想起を語り手とするテキストであるといえる<sup>8</sup>。

## 2-2. ボードレール「群衆」とショック経験

シャルル・ボードレール(Baudelaire, C-P. 1821-1867)が『悪の華』(1857年)を上梓した19世紀中葉のパリでは、工業および交通の急速な発達により、人間がそれまでの時代には体感したことがなかったようなスピードが実現された。はじめてこのようなスピードの直中に投げ出された歩行者は、ショックのあまり驚愕状態に陥ってしまう<sup>9</sup>。路上で驚愕状態に陥り、身体が自由がきかなくなると、それはそのまま死へとつながることもなりかねない。フロイト(Freud, S. 1856-1939)によれば、驚愕はまったく準備していなかった危険に陥ったときの状態、つまり、意識によるショック防御の欠落を示しているという<sup>10</sup>。ショックを防御し、驚愕状態における生命の危機を回避するためには、ショックを自ら理解可能な枠組みの中に自動的にマッピングする能力が必要である。こうして人々は、非人間的なスピードに適応するような知覚の変容を余儀なくされた。大都市が生み出したスピードというショックを、知覚の変容と意識の強化によって反射的に防御する能力を身に付けた人々は、やがて大都市大衆、つまり「群衆」という画一的で非人間的なスピードで動く人の流れを形成し始める。このように、大都市は群衆というショックをも生み出す。だが、人々は瞬間にこの群衆に適応し、群衆はもはや歩行者にとって驚愕状態を引き起こすようなショックではなくなる。

ベンヤミンは、意識の強化によるこのような危機への反射を、経験と区別して「体験Erlebnis」と捉えている。さらに、意識によってショックを防御することを「ショック体験Chockerlebnis」として、「ショック体験が標準となってしまった経験」が、群衆にとっての経験であると述べる<sup>11</sup>。

そして、このような「ショック体験」と区別されるのが、ベンヤミンがボードレールの芸術活動の核心と見なした「ショック経験Chockerfahrung」である<sup>12</sup>。それは、防御することなくあえてショックへと自ら飛び込み、驚愕状態に陥ることでもたらされる経験を意味している。ボードレールを驚愕状態へと陥れ、その経験を決定付けることになるのが、大都市の生み出すショックに慣れて均一化した反射的行動をとる、群衆というショックであるとベンヤミンは考える。

驚愕状態は、主体の空白という意味で、陶酔状態における超越的なものとのエロスの一体感に似ているために、そこへ身をまかせてしまいたくなる。だが、ボードレールは自らの時代に、常に何かが失われ、奪われていくという焦燥感も抱いていた。『悪の華』「憂鬱と理想」の85番目の詩篇「時計」には次のような詩句がある。「一時間に三千六百回『秒』はささやく/思い出せ！一虫のような声で口早に、/『現在』がいう、自分は『過去』だと、そして/厭らしい自分の象の鼻でお前の生命を吸い取ったと！」<sup>13</sup>。そしてこの詩は「もう何も彼も遅すぎる」という言葉で締めくくられている。ショック体験が標準化された時代だからこそ、ボードレールは前近代の世界に、万物が照応しあうエロスの一体感を夢想し、そこにある種の理想を見出そうとした。そのような理想が設定されることではじめて、ボードレールを襲った近代という時代の憂鬱は語り出される。ベンヤミンは、ボードレールの経験を以下のように捉えている。

肉体を痙攣させるもの・・・は、自分の存在をすみずみまでエロスに占有されている人がもつ幸福感ではない。それはむしろ、孤独な人間を襲いがちな性的な感乱状態である<sup>14</sup>。

群衆の直中におけるショックは、エロスの一体感ではなく、むしろ世界との断絶をこそ突き付ける。失われたものの理想化とそれに付随する憂鬱がボードレールの経験を特徴付けるのは、そのためである。このようなショックを経験の語りにもたらそうとすると、驚愕状態にとどまりながらも、そこから身を引き剥がそうとすることが必要になる<sup>15</sup>。上にあげた詩篇の最終行を、ショックがもたらす驚愕という出来事に慣れてしまうことなく、そこから身を引き剥がすためのボードレールの絶叫という経験の語りであると読むことができるのではないだろうか。このようにベンヤミンは、ボードレールの経験が、自分自身の輪郭がなくなるような驚愕の瞬間から、無理やりに身を起こし、立ち上がろうとすることで語り出されていると考える。

### 2-3. カフカー「謎」と身振りにおける経験

フランツ・カフカ(Kafka, F. 1883-1924)の作品『審判』(1912年)は次のように始まる。「だれかがヨーゼフ・Kを中傷したにちがいがなかった。悪いことはなにもしなかったにもかかわらず、ある朝彼は逮捕されたからである」<sup>16</sup>。このように、カフカ作品の主人公は「ある日」突然それまでとは似て非なる世界に投げ込まれる。日常を支えていたはずの法や暗黙の生活秩序や人間関係までもが、突如として「謎」と化し、出来事はそれぞれに不可解な身振りへと断片化される。そしてKは、彼を取り巻く人々の身振りのみならず、自分自身の身振りですら何を意味するのかわからなくなってしまう。未完成であるこの作品の最終場面において、その胸にナイフが突き刺さる刹那、目に入った窓からさしのばされた両腕に対してKの問いは溢れ出す。「だれだ？友人か？よい人間か？事の参画者か？助けようという者か？たった一人なのか？みんななのか？助ける道がまだあるのか？忘れていた異議があるのか？(中略) ついにおれの見なかった裁判官は、どこにいるのだ？ついにおれのいたらなかった高級裁判所は、どこにあるのだ？[K]は両手をあ

げて、その指をぜんぶひろげるのだった〔 ]は引用者による補足〕<sup>17</sup>。このように増幅していく問いは、そもそも、「何を意味するのか」という問い自体があらかじめ無効にされていることを示しているかのようだ。

ベンヤミンは、カフカの遺稿集に対する書評である「フランツ・カフカ『万里の長城が築かれたとき』(1931年)において、作者の意図が作品に意識的に実現されているというそれまでの文学解釈を、カフカの作品に適用することに対して疑問を呈している。それはカフカの作品を、現実に起こりつつあることに驚いて、どうしていいかわからずに、ふいにとった身振りにおける経験の語りと考えるためだ。ベンヤミンはカフカの経験を次のように捉えている。

カフカは果てしなく、経験の揺れ動く性質にかかづらっていく。あらゆる経験が足元でめりこんでいき、あらゆる経験が対極にあるそれと混じりあう<sup>18</sup>。

カフカにとって経験は、どこまでも謎のまま揺れ動き、安定した解釈において静止することを拒否している。この意味でカフカにおける身振りは、お話を動きの停止した閉じた世界にしないためのひとつの装置であるといえるだろう。野家啓一(1990年)は、ベンヤミンの「物語作者」(1936年)を引きながら、物語を「起源とテロスの二重の不在」と特徴付けているが、この意味でベンヤミンはカフカの作品に、語り継ぐことができるように開かれたままになっている物語との、ある種の類似性を見出しているといえる<sup>19</sup>。しかしながら、口から口へと物語を語り継ぐ支えとなる共同体的伝統は潰え、カフカには解釈すべき教義や聖なるテキストも、もはや与えられてはいない。したがって、カフカの作品に始まりも終わりも見出せないのは、語り継ぐためにあえて開いたままにしてあるというよりもむしろ、カフカが、経験の語りからすり抜けるような世界の謎に、投げ出されてしまっているためだ。

カフカはつねに身振りのなかでだけ、何かを具体的につかみとることができた。そしてこの身振り、彼が理解することはなかったこの身振りが、その寓話の雲のような場所を形づくっている。身振りからカフカの文学は生まれてくる<sup>20</sup>。

身振りは雲のように何かを包み込んでいるかのように見える。しかし、カフカにとって身振りは、何らかの内容を内に含んだものではない。なぜなら、身振りとして語り出される経験は、語られるたびごとに少しずつずれながら現れ、同一物を再現することはないからだ。したがって、安定したひとつの答えに行き着くこともまたない<sup>21</sup>。これは、目標を立てた上でいかにその目標に近付きえたか測定する経験の語り方をネガとするような経験の語り方であるといえるだろう。

ベンヤミンはこのように、プルースト・ボードレーン・カフカいずれの作家の経験の語りも、書き手の連続的な主体を中断するような出来事を契機としていたと考えた。この3人の作家は、それぞれに自らにとっては謎、もしくは失われたものであるような経験をもたらす出来事との出会いにおいて、経験の語りを発動させたというのである。この意味で、本論冒頭で述べた、私たちが人生で出会うひとつひとつ特異である出来事は、「私の」と呼ぶことのできないような経験の語り方を呼び覚ましうる、といえるだろう。では、このような経験の語り方を誘発する出来事は、いったいどのような性質を担っているのだろうか。次章では、この出来事について、ベンヤミンの経験へのアプローチにおいて重要な役割を担っている、時間軸には位置付かない「瞬間 Jetztzeit」の捉え方に照らして考察していきたい<sup>22</sup>。

### 3. 失われた時としての「瞬間」

経験の語りを発動させる出来事の特徴を考えるために、まずベンヤミンが3人の作家の作品に見出した、経験を語りにもたらず出来事を再度詳細に見ておこう。

それとの出会いがプルーストの語りを発動させる物体は、意識の外部に隠されているために、意志的追想では思い出すことができない。したがって、そこで語り出される経験は、プルースト自身が主体的に体験した出来事ということができない。この意味で、その際想起されるのは、失われて回復不可能な幼年時代であると同時に、語り出されることでしか立ち現われ得ないような経験である。ベンヤミンは、プルーストのテキストほど「多量で緻密なもの」がないのは、そのテキストが何らかの固有名をもつ主体を語り手としないためであるという。この意味で、無意志的想起によってもたらされる経験は、連続性と一貫性を前提とする主体の内部へと回収されるようなものではないと考えることができる。

ボードレールの経験へとアプローチするに際して、ベンヤミンはボードレールの詩篇のタイトルともなっている「万物照応correspondances」という概念を手がかりとする<sup>23</sup>。万物照応はそもそも、マクロコスモスとミクロコスモスの照応を指す、占星術やユダヤ神秘主義のカバラにも見られる概念である。宗教的な文脈に従って人々が自らの生を理解し得た時代には、舞踏や、特別な日に執り行われる儀礼や儀式において、人々は生物のみならず無生物をも含む万物と呼応し合い、世界の謎へと開かれることが可能であった。したがって祝祭日は、自分以外の人と共有可能な暦において世界へと開かれる入口を指し示していた。

先に見たように、ボードレールは万物照応におけるエロスの一体感を理想とすることで、自らの生きる近代という時代の憂鬱を語り出したのであった。

[ボードレールの世界に姿を現わす特異な]日々は、その他の日々と結び付いてはいない。むしろ時から突出している。それらの日々の内容をなすものを、ボードレールは万物照応という概念に定着した<sup>24</sup>。(〔 〕は引用者による補足)

ベンヤミンがボードレールの作品に見出したような特異な日々は、「特異」であるがために暦の上に位置付けることができない。それゆえに、そのような日々を他者と共有することもまた、できない。では、ボードレールの詩篇が、そこで描き出される憂鬱において、万物が照応するような世界が回復不可能だと暴露しているにもかかわらず、万物照応という概念において経験を語り出すというのは、どういうことなのだろうか。この点について、ベンヤミンは次のように述べている。

ボードレールが万物照応ということ考えていたのは、危機に対して確固たるものであろうとする、ひとつの経験であったといってよい。この経験は、礼拝的なものの領域においてのみ存在しうる。この領域を越え出ると、それはみずからを〈美〉として提示する。美においては、礼拝価値が芸術の価値として現われる<sup>25</sup>。

ここで、ベンヤミンがアプローチしようとするボードレールの経験が、フロイトが外傷神経症を引き起こす原因とした意識によるショック防衛が失敗した状態、人をショックが襲った際の驚愕状態であったことを思い起こそう。ボードレールにとって、驚愕状態における主体の空白の瞬間は、もはや取り戻しがたく失われた万物照応における経験の残滓を垣間見せる。たとえ万物が呼応しあう世界それ自体が、「経験を奪い取られた」近代以降の発見(発明)であるとしても、その

ように見立てることでボードレールは自らの使命として、「奪い取られてしまった」経験を語り出す。つまり、エロスの一体感と似て非なる驚愕状態における経験を、自分だけの「美」として語り出そうとするのである。

カフカの身振りにおける経験の語りは、そのつどずれながら不安定な状態にあることを先に述べた。ベンヤミンに従うなら、これはカフカが自らの作品の発表を控え、作品を破棄するよう遺言したこととも関わっている。カフカは、失敗し、挫折したものとして自らの作品を捉えていたとベンヤミンはいう。

挫折したのは、文学を教義へと移行させ、文学に寓話としての堅牢さと目立たなさを回復してやるという、その偉大な試みである<sup>26</sup>。

このように考えてくると、経験の語りを発動させる出来事が生じる瞬間を、ベンヤミンのいう危機の「瞬間」と捉えなおすことができるのではないだろうか。ベンヤミンは「歴史の概念について〔歴史哲学テーゼ〕」(1940年)において、次のように述べている。

過去を歴史的に関連づけることは、それを「もともとあったとおりに」認識することではない。危機の瞬間にひらめくような回想を捉えることである<sup>27</sup>。

ここで経験をもたらすような出来事として考察しようとしている瞬間は、過去から未来へと一直線に流れる時間軸において、ある一点となるような瞬間ではない。この意味で、私たちの意識や記憶にとっては「失われた瞬間」であると捉えなおすこともできるだろう。したがってそれは、自律的主体およびそのような主体概念を成り立たせるような、主体の連続性という考え方に切れ目を入れるような瞬間となる。ベンヤミンは、その経験へのアプローチにおいて、このような日常における主体の空白の瞬間に着目するのだ。

本稿がベンヤミンのテキストを手がかりに考察している瞬間は、「非日常」という言葉で置き換えることができるかもしれない。しかし、それは日常に対立する概念としての非日常ではなく、日常の直中にぽっかりと口をあける主体の空白の瞬間なのだ。例えば遊びに没頭する瞬間、書くことに熱中する瞬間、周囲を忘れて絵画に見入る瞬間など、私たちは「私の」といえる日常において、「私」を喪失する瞬間をそうとは気付けないままに、生きている。この点を、ベンヤミン—ボードレールが万物照応から考えようとした「美」として現れる経験と捉えてみたい。このように「私」が消える瞬間を、日常と相容れない、失われた原始的・宗教的瞬間とのみ捉えていては、失われた時に対するノスタルジーに囚われてその回復を希求するにしる、そのような瞬間は結局事後的につくられたフィクショナルなものだと断定するにしる、私たちが生きている日常を矮小化することになるのではないだろうか。このような瞬間がそのつど姿を変えながら垣間見せる「美」、つまりは世界の謎は、汲み尽くされることなく新たなる経験の語りを呼び起こす。

このようなベンヤミンにおける瞬間の捉え方は、彼の「救済」に関わる思索に深く結び付いている。今村仁司(2000年)は、ベンヤミンが時間軸に位置付かない瞬間に救済の契機を見出そうとする背景には、彼の進歩主義史観に対する痛烈な批判があるとして、「歴史哲学テーゼ」を読み込む過程で次のように述べる。「ベンヤミンの特異点は、直線を『切断する』点であり、この切断は連続線の『外部から』くるから、それは直線すなわち『世界』の外にあり、いわば超越的である。…特異点は、イデア界や神学的神が共有していた機能だけを継承する。すなわち、連続性を切断する機能である」<sup>28</sup>。今村のいう特異点は、本稿で考察してきた瞬間と重なる。ショッ

クに襲われる瞬間のように、意識が切断され主体が空白となる状態においては、時間の不連続性が生じる。それは、外的なショックにさらされた状況に、言葉をすぐさま対応させることができないからだ。自らの意志では捉えることができないような瞬間は、言葉による説明を許容しないという側面がある。そのような瞬間が言葉による定着と安定を拒むからこそ、経験の語りはずれながら重ねられていくのである。

本稿で扱っている瞬間について考察を深めるために、メディア変容にともなう経験の変容という観点に立ち、ベンヤミンの思想をメディアという概念を軸に教育思想として再構成している今井康雄の論を取り上げよう。今井康雄は『メディアの教育学』(2004年)において「経験の可能性を意識の外部に設定するというベンヤミンの試みは有効性を失っている」と述べる<sup>29</sup>。なぜなら、外部からもたらされるどのようなショックも、真正性・客観性・社会性という3つの次元に乖離した書くことの実践に捕捉され、ベンヤミンのいう意味での新たな経験を開く契機にはならないためだ。しかしながら、経験を書くこと語ることが、外部にさらされた後、事後的・反省的に遂行されるというのではなく、まさに私たちに襲い掛かるその瞬間との緊張関係においてなされると捉えるならば、それは、文学作品に現われるような、生きた経験の謎をつかみ取るような経験の語り方を開きうるのではないだろうか<sup>30</sup>。

ベンヤミンがアプローチしようとするのは自分に襲い掛かる出来事においてまさに起こりつつある経験であり、彼の課題はその描写である。この意味でベンヤミンは、彼がその経験へとアプローチしようとしたブルースト、ボードレル、カフカといった作家と同じ危機の瞬間に瀕した経験を語る使命を生きていたといえるだろう。次節では、これまで論じてきた瞬間、つまり出来事と、経験の語り方との関わりから文学作品における経験の語りを検討して本稿の結びへと向かおう。

#### 4. 出来事と経験の語り方

ベンヤミンの考える、経験を語りへともたらず契機となる出来事とその経験の語り方との関わりを、次にあげる「ブルーストのイメージについて」(1929/1934年)からの引用を手がかりに考察していきたい。

匂い、それは「失われた時」という海に網を投げる者が得る、重さの感覚である。そして、[ブルースト]の文章は、知性の肉体が行う筋肉運動の総体であり、この収穫を引き上げるときのあらゆる労苦、名状しがたい労苦を含んでいる<sup>31</sup>。(〔 〕は引用者による補足)

ここでいわれている「匂い」は、これまで見てきたそれぞれの作家を主体の空白の瞬間へと開く出来事と考えることができるだろう。重量を持たない匂いとしての出来事は、そのような出来事に駆動される経験の語り方においては、確かな重みとして感じられる。それはつまり、このような出来事は、語り出されることではじめて立ち現われるゆえに、語り出されることがなくては、そもそも経験とはなりえないということだ。だがこれまで見てきたように、出来事に駆動されるような経験の語り方は、あらかじめ設定し得るような形式を取らない。なぜなら、このような経験の語り方は、出来事に襲い掛かれる瞬間にはじめて動き出すからだ。

ベンヤミンの捉える経験の語り方から3人の作家を捉えなおしてみると、ブルーストの場合は語りの主体の場所を空っぽにするような語り方であり、ボードレルの場合は驚愕が叫びとなっ

でもたらされる語り方、カフカの場合は動きつつある身振りにおける語り方であった。いずれの場合も、経験の語りを駆動する主体の空白瞬間が、文学作品のもつ、私たちの経験のありよう自体をも変容させ得る力となっているように思われる。

プルースト・ボードレール・カフカの経験の語りは、当然のことながらそれぞれの時代に深く関わっている。このように見てくれば、ベンヤミンはそれぞれの作家が、その時代において特徴的に立ち現われてきた経験をどのように捉えようとしたのかに注目していることがわかる。文学作品における経験の語りは、その時代の萌芽的经验をつかみとっていきような語りなのだ。だが、人間の経験という側面から考えるのであれば、そこには時代の特徴を越えた経験がもつ特質といったものがあるだろう。その特質は、ある時代において拡張されることで、はじめて私たちに気付かれるようなものである。この意味で、後の時代においてははじめて語り得る経験が、振り返ったときに前の時代にも見出されることもありうるのだ。このように、ある時代における経験はあらゆる時代の経験との緊張関係のなかでより生き生きとした姿を現わすことになる。そのような経験は、勢いよく燃え上がる炎として私たちにさらなる経験の謎を投げかけてくるのである。

ベンヤミンは、出来事を経験の語りへともたらずような、主体の連続性を切断する瞬間から、文学作品に描き出された生きた経験の謎へ迫ろうとする。このような経験の謎へのアプローチは、幼年時代が想起されるテキストである、「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」(1932-35年)というベンヤミン自身の経験の語りでも鮮やかに実践されている。

これまで見てきたように、ベンヤミンに従えば、文学作品に生き生きとした謎を秘めた経験が描き出されるのは、かつて経験としては語り得ず、したがって経験とはなり得なかった経験を先行的に語る経験の語り方が展開しているためであるといえる。それゆえに、優れた文学作品は私たちの経験を誘発し、日常における経験の新たな地平を生み出し続けていく。そうして語り出された文学作品における経験は、それ自体がまた生きた謎を秘めて私たちの経験そのものを変容させるだろう。

本稿冒頭で取り上げた経験の語りの固定化を、これまで考察してきたベンヤミンの経験へのアプローチに照らして考えなおすならば、私たちの日常において常に生起している、意志的に捉えることのできない、世界に開かれた主体の空白の瞬間を、役に立たないものや意味のないものとして切り捨てている状態と考えることができるだろう。固定化された経験の語りの形式においては、出来事の特異性やある種の異常性(非-日常性)といったものは語られないままに置き去りにされてしまう。それゆえに、一義的な解釈を拒否するような、私たちに襲い掛かるようにしてもたらされる教育におけるさまざまな出来事を、経験の語りにもたらずことには難しさが付きまとう。ベンヤミンの経験へのアプローチが示すように、日常における主体の空白の瞬間は、出来事自体に語らせるような経験を私たちにもたらずこともある。そして、「私の」経験の語りには私ならざる次元が現われることは、私たちを生き生きとした経験の深みである、生命の次元へと連れ出してくれる。

ベンヤミンは、成長・発達に結びつく個人の内側に蓄積可能な経験ではなく、すでにある経験の語り方では語り得ない経験について考察しようとした。ゆえに、そのような経験を捉えるような経験の語り方が問題となったのであった。時間の連続性をひとつひとつ特異な出来事

が切断し、そこに語り出されるかもしれない「豊かな経験」が躍動している。経験の語り方が、自律的主体の形成という目的に照らした教育における経験の語り方と、少しずつずれていくことが、逆説的に、人間形成において変容をもたらすような教育のあり方を描き出すことを可能にするのではないだろうか。ベンヤミンにおける経験へのアプローチは、企図できない事柄において、はじめて起こりうる人間の変容の本質を私たちに垣間見せる。

ここで考察してきた課題と教育学との関連はさまざまに見出される。ベンヤミンの経験へのアプローチという観点から、近代教育が自明視してきた自律的主体およびそのような主体概念を批判的に検討することは、教育関係の自明性を捉えなおすことにもつながるだろう。なぜなら、自己の語りに、自らは意志的に知り得ない何かに関わることは、自己と他者という境界の再考を私たちに迫ることになるからだ。また、ベンヤミンのテキストを通して見えてきた経験の深みとも呼べる次元と、自己の浮遊感と「自分探し」への焦燥感に揺れ動く現代の状況を緊張関係のうちに捉えながら、教育学において経験がどのように語られ、そして読まれるべきかへと考察を深めることを今後の課題としたい。

## 註

ベンヤミンからの引用には、原著と、原著と=で区切ってちくま学芸文庫『ベンヤミン・コレクション』の該当巻数と頁数も示した。

<sup>1</sup> 野家啓一(1990年)は、「語る」ことを「人と人との間に張り巡らされた言語的ネットワークを介して『経験』を象り、それを共同化する運動」と特徴付けている(野家啓一「物語行為論序説」『物語』55頁)。本稿では、語りにおいて経験が象られていくという野家の考えを踏襲しつつ、経験の同一性を裂開させるような瞬間を経験にもたらすような経験の語り方を考察していく。

<sup>2</sup> 香川大学教育学研究室編(1999年)、矢野智司・鷲野克己編(2003年)などを参照されたし。ここでは特に、以下にあげる西村拓生の論を念頭においている。「人間は本質的に『物語る存在』であり、人間の生は『物語る』というあり方から逃れることはできない、という認識は、今日、私たちにとってますますアクチュアルになりつつある。しかし、その認識が原理的にはらんでいるラディカルな人間形成論の意味は、未だ十分に酌み尽されているとは言えないのではないだろうか。『物語』が『現実』や『实在』の彼岸において付随的に私たちの生を映しだしたり修飾したり、あるいは偽装したりするのではなく、もはや『現実』とも『虚構』とも区別し得ない私たちの〈世界〉や〈主体〉そのものを、そもそも最初から構成・構築するのだと理解するならば、その時、人間の生成や発達も、『現実/虚構』『实在/仮象』の二項対立を前提とした従来の視点からとは根本的に異なった様相において立ち現れてくるはずである。」西村拓生「『美しい仮象の国』はどこにあるのか?」『物語の臨界』280頁

<sup>3</sup> Standish, P. (2007年)は、自己の同一性強化と他者性排除への懸念から教育学におけるナラティブ・リサーチに対する批判的考察を行っている。また、自分探しにおける「自分とは何か」という問いの近代的条件については細辻恵子「嗜癖としての『自分探し』」『野性の教育をめざして』69-86頁。

<sup>4</sup> 「ゲーテの『親和力』」は、神話、運命、法、決断、希望の関連からゲーテの小説『親和力』を批評したものであると同時に、ベンヤミンの批評の思想と方法論が述べられたものでもある。

<sup>5</sup> GS 1:126=「ゲーテの『親和力』」『ベンヤミン・コレクション』第1巻、42-43頁

<sup>6</sup> GS 5:509, K8a, 1. =『パサージュ論』第3巻、42頁。また、同じ箇所の一部が「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」にも引用されている。

<sup>7</sup> GS 1:608=「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』第1巻、421頁

<sup>8</sup> GS 2:311-312=「プルーストのイメージについて」『ベンヤミン・コレクション』第2巻、415-417頁。GS 1:610=「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』第1巻、4

23頁

- <sup>9</sup> ベンヤミンのテキストには、このような大都市における非人間的な状況をはじめて目の当たりにした当時の知識人の書簡が引用されている。それらの書簡にはいずれも嫌悪感や嘆きが綴られている(GS 1:619=同上書436頁)。また、工業化に伴う近代技術の発達、人間の知覚および美的経験をいかに変容せしめたかについては今井康雄(1998年)に詳しい。
- <sup>10</sup> フロイト「快感原則の彼岸」『自我論集』122-123頁。同じ箇所でもフロイトは、驚愕、恐怖、不安の違いについて論じている。これらは、危機に対する関係において区別すべき概念であるという。恐怖と不安についても以下に引用する。「不安は、危機を予期し、危機に備える状態を指すが、この危機は未知のものでかまわない。恐怖は特定の対象が必要であり、この対象が恐れられるのである。」
- <sup>11</sup> GS 1:614=「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』第1巻、429頁
- <sup>12</sup> GS 1:616=同上書431頁
- <sup>13</sup> ボードレール『悪の華』190頁
- <sup>14</sup> GS 1:623=同上書441頁
- <sup>15</sup> GS 1:626-627=同上書445頁。また、ベンヤミンはボードレールを「高度の意識性(傍点筆者)」をもつ抒情詩人と呼んでいる(GS 1:614=同上書429頁)がそれは、後述するように彼が未だ語られたことのないような経験を先行的に語り出すためである。
- <sup>16</sup> カフカ『審判』5頁。原題は訴訟(Prozes)。
- <sup>17</sup> カフカ『審判』336-337頁
- <sup>18</sup> GS 2:428=「フランツ・カフカ」『ベンヤミン・コレクション』第2巻、146頁
- <sup>19</sup> 野家啓一「物語行為論序説」『物語』52頁。また、ベンヤミンの時代診断である「経験の貧困」における「物語」の位置付けについては、GS 2:439-465=「物語作者」『ベンヤミン・コレクション』第2巻、283-334頁。
- <sup>20</sup> GS 2:427=「フランツ・カフカ」『ベンヤミン・コレクション』第2巻、144頁
- <sup>21</sup> ベンヤミンは「プロレタリア子ども劇場のプログラム」(1928年)という小論において、子どもの演技における身振りの重要性についても述べている。「作品の『永遠』ではなく、身ぶりの『瞬間』こそが、子どもの演技のめざすものだ。」「プロレタリア子ども劇場のプログラム」『教育としての遊び』丘澤静也訳1981年 晶文社108頁。ここからも、ベンヤミンの考える瞬間の特異性が読み取れる。また、今井(1998年)は、この子どもの身振りを教育のメディアと捉え、身振りにおいて子どもと大人の世代がすれ違う肯定的な意味について詳細に考察している。
- <sup>22</sup> Jetztzeitは「今このとき」「いま—こ—そ—の—とき」など多様な訳語があるが、ここではこの概念が示すつかみがたさや、移ろいやすさを重視するために「瞬間」を採用する。この概念は、瞬間に生起するというベンヤミンの「アクチュアリティ」の捉え方と密接に結び付いている。また、ベンヤミンにおける経験へのアプローチがこのような瞬間と深く結び付いている理由を、彼の真理の捉え方に見出すことができるだろう。「真理が望んでいるのは、突然に、あたかも一撃をくらったかのように、自己沈静から引き出されること、騒音であれ音楽であれ助けを求める叫び声であれ、そうした物音に驚かされて飛び起きることなのだ。」GS 4:138=「一方通行路」『ベンヤミン・コレクション』第3巻、121頁。このようにベンヤミンは、真理を、瞬間に一回的に立ち現れる動きつつあることと捉えている。
- <sup>23</sup> 堀口大輔は「呼応」と訳している。
- <sup>24</sup> 同上書459頁
- <sup>25</sup> GS 1:638=「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』第1巻、461頁
- <sup>26</sup> GS 2:427=「フランツ・カフカ」『ベンヤミン・コレクション』第2巻、144頁
- <sup>27</sup> GS 1:695=「歴史哲学テーゼ」『ベンヤミン・コレクション』第1巻、649頁。訳は今村(2000年)も参照した。
- <sup>28</sup> 今村『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』165-166頁。また三島憲一(1998年)も、ベンヤミンの思想は「幸福主義的な進歩史観を徹底的に嫌う態度であり、また、連続性よりは瞬間を認識のチャンスと見る考

え方にもとづくアナムネーシス(追想・憶想)であった」と指摘している(『ベンヤミン』271頁)。

<sup>29</sup> 今井康雄『メディアの教育学』205頁

<sup>30</sup> この点については、次のような高野克己(2003年)の指摘を参考にした。「生きることを『物語ること』は、つまりは、生きることにおける『物語ることの外』と遭遇するべく営まれるものであり、この『外』との遭遇を通じて、意味づける行為のもちえていた原初的な創造性が、物語ることのなかに蘇るのだとはいえないであろうか」(高野克己「物語ることの内と外—物語論の人間研究の教育学的核心」『物語の臨界』21頁)。また、書くことのこのような側面を考えていくためには、ベンヤミンが、語ることには必ず物語に聴き入る瞬間が先行すると論じていることについて検討する必要があるが、この点に関しては稿を改めることにしたい。

<sup>31</sup> GS 2:323-324=「プルーストのイメージについて」『ベンヤミン・コレクション』第2巻、441頁

## 引用・参考文献

- Benjamin, W.: Goethes Wahlverwandtschaften(1921-1922), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.1, Frankfurt a.M.=浅井健二郎訳 1995年 「ゲーテの『親和力』」『ベンヤミン・コレクション』第1巻 ちくま学芸文庫
- : Einbahnstrasse(1928), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.4, Frankfurt a.M.=久保哲司訳 1997年 「一方通行路」『ベンヤミン・コレクション』第3巻 ちくま学芸文庫
- : Franz Kafka: Bein Bau der Chinesischen Mauer (1931), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.2, Frankfurt a.M.=浅井健二郎訳 2007年 「フランツ・カフカ『万里の建設に際して』」『ベンヤミン・コレクション』第4巻 ちくま学芸文庫
- : Zum Bilde Prousts(1929/1934), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.2, Frankfurt a.M.=久保哲司訳 1996年 「プルーストのイメージについて」『ベンヤミン・コレクション』第2巻 ちくま学芸文庫
- : Franz Kafka Zur zehnten Wiederkehr seines Todestages(1934), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.2, Frankfurt a.M.=西村龍一訳 1996年 「フランツ・カフカ—没後十年を迎えて」『ベンヤミン・コレクション』第2巻 ちくま学芸文庫
- : Berliner Kindheit um Neunzehnhundert(1932-1935), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.4, Frankfurt a.M.=浅井健二郎訳 1997年 「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」『ベンヤミン・コレクション』第3巻 ちくま学芸文庫
- : Der Erzähler Betrachtungen zum Werk Nicolai Lesskows(1936), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.2, Frankfurt a.M.=三宅晶子訳 1996年 「物語作者—ニコライ・レスコフの作品についての考察」『ベンヤミン・コレクション』第2巻 ちくま学芸文庫
- : Über einige Motive bei Baudelaire(1939), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.1, Frankfurt a.M.=久保哲司訳 1995年 「ボードレールのいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』第1巻 ちくま学芸文庫
- : Das Passagen-Werk, in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.5, Frankfurt a.M.=今村仁司他訳 2003年 『パサージュ論』第3巻 岩波現代文庫
- : Über den Begriff der Geschichte (1940), in: 1980 Gesammelte Schriften Bd.1, Frankfurt a.M.=浅井健二郎訳 1997年 「歴史の概念について〔歴史哲学テーゼ〕」『ベンヤミン・コレクション』第1巻 ちくま学芸文庫
- ボードレール, C-P. 堀口大學訳 1953年『悪の華』 新潮文庫
- フロイト, S. 竹田青嗣編・中山元訳 1996年 「快感原則の彼岸」『自我論集』 ちくま学芸文庫
- 今井康雄 1998年 『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育』 世織書房
- 2004年 『メディアの教育学—「教育」の再定義のために』 東京大学出版会
- 今村仁司 2000年 『ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」精読』 岩波書店
- 市川浩他編 1990年 『物語 (現代哲学の冒険8)』 岩波書店
- カフカ, F. 辻理訳 1966年 『審判』 岩波文庫

辻：文学作品と経験の語り方

- 香川大学教育学研究室編 1999年 『教育という「物語」』 世織書房  
亀山佳明他編 2000年 『野性の教育をめざして—子どもの社会化から超社会化へ』 新曜社  
三島憲一 1998年 『ベンヤミン』 講談社  
ブルースト, M. 井上究一郎訳 1984年 『失われた時を求めて—第一篇スワン家のほうへ』 筑摩書房  
Smeyers, P. Smith, R. Standish, P. (2007) The Therapy of Education. London. Palgrave  
Macmillan.  
矢野智司・蔦野克己編 2003年 『物語の臨界—「物語ること」の教育学』 世織書房

(臨床教育学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月1日、受理2008年12月11日)

## Literature and Way of Talking about Experience: Reconsidering the Concept of Experience in the Light of Walter Benjamin's Text

TSUJI Atsuko

In the context of modern education, which is based on the idea of steady growth and development of human beings, experience is usually considered as accumulative by human beings to strengthen the autonomous self. From this point of view, we tend to talk about our experiences rigidly and in a stereotyped way in which we can place events of our lives into a frame of understanding. However, it seems that there is a reduction of the concept of experience to the assumption of usefulness, and a kind of strange aspect of events will be missed in this way of talking about experience. To overcome this situation, I examine Walter Benjamin's concept of experience. Benjamin (1892 -1940) generally is known as a philosopher influenced by various aspects of thought, such as German idealism, Jewish mysticism, and Marxism. I will try to show the concept of experience in Benjamin's text, especially as this is revealed in his essay on Proust, M., Baudelaire, C. and Kafka, F., to elucidate the most vivid aspects of experience. In conclusion, I will show that Benjamin's concept of experience dispels the notion of experience that is popularly held and that is taken for granted in educational theorizing.